

有栖川宮熾仁親王と出口王仁三郎

# 落胤問題を実証する

(十八)



出口禮子

## 賀茂行幸

有栖川宮熾仁親王と聖師の御生母上田よね刀自との出会いについて触れる前に、どうしても維新前夜におかれた熾仁親王の位置とお立場について理解しておかねばならぬ。維新史の復習のようで恐縮だが、有栖川宮家に焦点を合わせつつ、今少し時代の動きをみていただきたい。

維新の立役者は、いうまでもなく薩摩・長州の両藩であるが、藩論が統一して倒幕に立ち上がるまでのそれぞれの内部には、複雑な葛藤があった。

万延元年（一八六〇）七月、攘夷と夷狄に通牒する姦吏の排除を目的として、長州藩尊攘志士と水戸藩尊攘志士との間に「成破の盟」が結ばれ、水戸藩が破壊活動、長州藩が事態收拾に当たることを誓い合った。しかし長州藩では、文久元年（一八六〇）三月、直目付長井雅楽の建白した「航海遠略策」が藩是と

決定する。長井の建言は和宮降嫁奏請など一連の幕府の公武合体の動きに応じたもので、朝廷の鎖国攘夷の方針を変え、開国進取の方針によって大いに国威を張り、公武合体・海内一和しようという雄大な構想である。藩主毛利慶親は、信任する長井を幕府と朝廷に派遣して政治工作させ、一時は成功するかに見えたが、藩内外の猛烈な反撥をくい、翌文久二年には一転して長井の失脚となる（長井はこの年、国内屏居、ついで自刃を命ぜられる）。その後、長州藩では、尊王攘夷派が主導権を握って「破約攘夷」説をとり、もし朝廷への忠節が傷つくような場合には、幕府への信義に欠けることも、防長二藩をなげうつことも止むを得ず、という藩是を確定した。七月には藩主毛利慶親、世子定広が入京して、国事周旋にあたる。以後、長州藩の志士は尊攘派の代名詞ともなり、長州はその拠点となった。

一方、薩摩藩では、安政五年（一八五八）年七月、藩主島津

齊彬なりあきらが死ぬと、齊彬の弟久光の長男忠義が藩主になった。久光は忠義の後見役となつて藩の実権を握る。文久二年四月、島津久光は藩兵千余人をひきいて上京する。久光の意図は、雄藩連合勢力を背景とする公武合体・幕閣改造にあり、倒幕など思いもよらぬことであつた。久光の真意を知らぬ急進派志士たちは、今こそ薩摩の軍事力を中心に倒幕の軍を挙げることを望んだ。しかし上京後の久光の態度は彼らの期待を裏切るものであり、しびれを切らした急進派の薩摩藩士は、関白九条尚忠所司代酒井忠義を殺し行動開始の先端を切ろうと計画、四月二十二日、大阪藩邸を脱出して伏見の寺田屋に集まつた。これを知つた久光は九人の剣客を選んで鎮撫に行かせたが、ついに乱闘となり、六名が即死、二名が重傷、薩摩藩急進派の首脳部は壊滅する。有名な寺田屋騒動である。

急進尊攘派を鎮圧した久光は、公武合体運動をさらに推進するため、勅使を江戸に派遣することを朝廷に建言していれられた。勅使に公卿大原重徳しげのりが選ばれ、藩兵をひきいて護衛に当たつた久光は、六月はじめ江戸に到着した。勅旨は將軍の入朝、五大老の設置、一橋慶喜を將軍補佐、松平慶永よしながを大老として幕政を運営すべし、の三事である。いちおうの目的を達した久光は、八月二十一日、江戸を発して帰郷の途につく。そして武蔵国生麦村なまむぎで家来がイギリス商人らを殺傷する事件を起こす。

閏八月十八日、孝明天皇は親王以下群臣に勅して、攘夷についての意見をお聞きになつた。「生麦事件」が国際問題化しようとするのに、深く宸襟しんきんをなやまされたものであろう。これに対し、有栖川宮熾仁親王は、左の奉答をさし上げている。

今般夷狄跋扈につき尋ね下され謹みて承り候、そもそも先年関東より言上候垂夷一件条約書申願一覽の上、宸襟しんきんを悩まされ候段まことに恐懼無限、国家の大事を坐視するに忍びず、さる戊午の年二月言上し候存意註安政五年に家臣飯田忠彦と謀つてさし出した建白書をさす）当時に到るもいささかも変心これなく、なにとぞ国内人心一致の上速やかに攘夷これあり、蛮夷の書を除去候はば神州一体の人望にもあいかない、いよいよもつて皇威万国に照耀しょうようし、永世平穩と存じ上げ奉り候 謹言

後八月二十日 熾仁

熾仁親王（二十八歳）の攘夷の念は、四年前に建白書をさし出した血気さかなな当時と、少しも変わつていられない。攘夷はまさに一種の熱病だった。この頃の京都の町は文久二年七月の九条家家臣島田左近の暗殺を皮切りに、尊攘激徒の始めた「天誅」と称する猛烈なテロの嵐が吹きすさび、身に覚えのあるものを震え上がらせていた。生麦事件を起こした島津久光は閏八月に京都に帰つたが、彼の願う公武合体の方向とは逆に、京都

の政情は一変したのである。十月、再び勅旨が江戸に派遣された。攘夷の決行と親兵編制の朝廷の意思を伝えるもので、勅使には少壮急進派公卿三条実美が選ばれた。

勅使を迎えた幕府は動揺したが、結局十二月になって「勅書謹みて拜見仕り候、勅諭の趣きかしまり奉り候、策略等の儀は御委任なし下され候条、衆議を尽し上京の上、委細申し上げ奉るべく候、誠惶謹言」と將軍家茂の名で奉答書をさし出す。將軍みずから上京して攘夷の方法について述べねばならぬ仕儀となった。

文久三年（一八六三）二月十三日、將軍家茂は、共棲短い和宮を残して江戸を出発、総員約三千人の大行列に將軍家の威信を誇示しつつ、三月四日、「天誅」の勢いやまぬ京都に入り、二条城を宿舍とする。將軍上洛は寛永年間三代將軍家光以来二百数十年ぶりのこと、どのように武威を張って見せても幕府の權威の揺らぎはかくせぬ。尊攘派は待ちかまえていた。

將軍が上洛した京都は、まさに尊攘派の天下である。文久二年二月には新しく国事御用掛が設けられ、関白、左大臣、右大臣らのほかに三条実美、姉小路公知、三条西季知の少壮急進派が任命される。更に翌三年二月には国事参政・国事寄人の二職が加えられ、少壮公卿たちが進出して、朝議はほとんど若い彼らによって動かされる状態となっていた。

前年藩地鹿兒島に帰った公武合体派の重鎮島津久光は將軍の上洛で再び京都へ上つてきたものの、手のつけかねる京都の形勢をみて滞京五日にして大阪へ去り、早々に藩地へ引きこむ。政治総裁職松平慶永は辞表を出して無断で福井へ、山内豊信は土佐へ、伊達宗城は宇和島と、公武合体派の有力大名はそれぞれ藩地へ帰り、雄藩で残ったのは尊攘派の長州藩世子毛利定広ばかり。毛利定広は尊攘派志士たちと謀り、攘夷のために賀茂両社、泉涌寺、石清水八幡宮に順次行幸を仰ぐことを献策、朝議はこれを決定した。

三月十一日、攘夷祈願のための賀茂神社両社行幸が行われ、將軍家茂、一橋慶喜以下老中が供として従った。このような盛儀のおこなわれるのは寛永三年後水尾天皇の二条城行幸以来二百余年ぶりのことで、鹵簿（儀杖を備えた行幸・行啓の行列）を拜まんものとして、遠近より上洛するもの数方に達したという。彼らの脳裏には、將軍の上になお君臨する存在のあることが、はつきり現実のものとして焼きつけられたであろう。熾仁親王は、命により先着して供奉した。

四月十一日、いよいよ石清水行幸である。はじめは長州藩の建言で攘夷親征を名目としたが、叡慮はいまだ時期尚早として許されず、賀茂と同じく攘夷御祈願と改められた。この時もまた熾仁親王は先着して、御祈願に供奉する。將軍家茂は風邪を

理由に引きこもり、代わつて一橋慶喜を随行させる。世上には、將軍假病説が流れた。この日、慶喜を社頭に召して天皇より攘夷の節刀を下賜される予定であつたが、慶喜は腹痛を理由に山の下寺院で静養して登山しなかつたため、尊攘派の志士たちのもくろみは破れ、一時は殺気が山中に充満したという。慶喜もまた假病であつた、と噂された。

將軍家茂が海路江戸に帰つたのは、六月になつてからである。容易に江戸へ帰る許可が出なかつた。しかも四月十八日には攘夷期日を文久三年五月十日とする言質まで朝廷にとられ諸大名に布告せねばならぬさんさんの体たらく、幕府の権威は、さらに失墜した。

その五月十日、幕府が朝廷に約した攘夷期日がきた。待ちかねていた長州攘夷派は、ついに、下関海峡通過のアメリカ商船に発砲して、攘夷実行の狼煙を上げ、二十三日にはフランス軍艦、二十六日にはオランダ軍艦に砲火をあびせかける。しかし六月一日にはアメリカ軍艦から、続いて五日にはフランス軍艦から報復を受けて大損害をこうむり、彼我の実力の差をまざまざと見せつけられる。さらに七月二日には生麦事件の外交交渉が決裂し、薩摩藩とイギリス艦隊の間に砲火をまじえる。薩摩藩としては善戦したが、ここでも彼我の武器の優劣の差を認めぬわけにはいかなかつた。攘夷の先鋒であつた薩長両藩が、い

たずらに攘夷を固執することの愚に目ざめ、外国の長所を採り入れ、国力を充実し、外国にひけをとらぬだけの武力を持つて万国に対峙するといふ「大攘夷」に気づいたことは大きな教訓であつた。薩摩とイギリスの関係は講和後一転して親密な方向をたどる。長州藩もその後(元治元年八月)四国連合艦隊と戦つて惨敗を喫するや、薩摩と同様イギリスに接近、多くを学んだ。

文久三年八月十三日、大和国行幸の詔勅が出された。尊攘派の盟主長州藩の建言による。攘夷親征の名を借りてその実、倒幕の機会をとらえようとの狙いであつた。当時、尊攘派によつて藩論が統一されていたのは長州藩だけであり、他藩は尊攘志士はいても藩政を動かすほどの力になつていない。当然公武合体派の公卿や藩主の中に反対論者も少なくなかつたが、それを天誅で威嚇し、強引に押し切つて、詔勅下命にまでこぎつけたものである。

熾仁親王はこの時も行幸の先着を志望され、八月十五日、左の願書を議奏に提出される。

今度攘夷御祈願につき、大和国行幸、神武帝山陵・春日社など御拝、しばらく御滞留、親征軍議あらせられるべく、その上神宮行幸おおせ出され候については、遠境、ことに数日行幸の議、容易ならざる次第、深くおそれいり存じ候、ついで熾仁不肖ながら拝従候儀許されたく、伏して懇願に候、

もつとも賀茂・石清水両度の行幸先着参向候間、なにとぞこの度においても御列外参向願ひ申し候、よろしくこの旨御沙汰頼みいり存じ候、謹言

八月十五日 熾仁

翌十六日、熾仁親王に西国鎮撫使に補される旨の勅詔が下る。鎮撫使の任務は表面的には長州藩が下関で外艦を砲撃したときに、傍観していた対岸の小倉藩の違勅の罪を責めて追討するためともいい、あるいは関西を倒幕の根拠地とする地盤固めのためともいう。この任命の裏面には、その実複雑な内部抗争が火花を散らしていたのである。

十七日長州藩士桂小五郎（木戸孝允）、久留米藩士淵上郁太郎が有栖川宮邸に伺候、諸大夫栗津義風らと何事か面談し、親王に言上を請うている。のちに長州藩士品川弥二郎が語っているように、倒幕を志す志士たちが親王、公卿の中で一番の頼みと仰いだのは、熾仁親王であつたらう。熾仁親王はかつて日米通商条約に関して幕府攻撃の建白書を認めたほどの攘夷論者であり、天皇家のお血筋とは最も近く、孝明天皇も信頼されている。和宮との悲恋は、志士たちばかりか、庶民の間にも誰知らぬはなく、幕府への義憤は、親王に対する同情的な気ともなつて返つていた。その上、長州藩主毛利氏と有栖川宮家とは古くから縁戚関係でもあつた。熾仁親王の大伯母幸子女王が元長州藩

主毛利敬親の三代前の藩主斎房に嫁している。まさに熾仁親王は、尊攘派盟主と仰ぐにうつつつけの存在であつたといえよう。

これに対する公武合体派の公卿の中で指導的役割を果たしたのが中川宮朝彦親王であつた。中川宮（後に久迩宮と改称）は伏見宮邦家親王の第四王子として、文政七年（一八二四）に出生。文政八年親王宣下があり、興福寺一乗院に入室、法諱を尊応と称する。やがて青蓮院に移り尊融と改め、世に栗田宮といわれた。天台座主として宮廷勢力の輿望を担つたが、安政五年（一八五八）の大獄に永誓居の処分を受け相国寺に幽居された。文久二年（一八六二）七月許されて青蓮院に還往、つづいて九月、「国事多端につく叡慮悩ませられ候につき、御相談かつ御扶助申し上げ候よう仰せ出されること」との内勅を賜う。十二月九日には国事御用掛に任ぜられ、宮廷の表面に浮かび出る。翌文久三年一月二十八日、特旨をもつて還俗の内勅を賜い、これより中川宮朝彦親王と称する。

西国鎮撫使任命にからむ、朝廷内部の両派の抗争については、当時の議奏長谷川信篤子爵の後年の談（有栖川宮熾仁親王行実）がのこっている。

「大和行幸に関しては、倒幕・佐幕の両派に分れ、前者はこれによつて攘夷の決行を幕府に責めむとし、後者はこれを軽拳無謀となし、論難攻撃、互いにあい屈せず。そのとき中川

宮は急進の説を喜ばれざりしをもって、討幕派はおのが計画の阻害せられんことを憂い、鎮西鎮撫を名としこれを京外に遠ざけんと、まずその命を同宮に伝えられしに、いつしか佐幕派に偵知せられ、中川宮も辞退せられしかば、やむを得ず、表面上なお前議を続け、ここに意外にも親王の任命をみるに至りしなり」

## 八・一八クーデター

大和国行幸の準備は、具体的に推し進められつつあった。《義挙録》(旧岡藩士小河一敏著)によれば、伝奏野宮家より加賀、薩摩、肥後、長門、阿波、筑前六藩へ御達にて行幸御用金金拾万両ずつ調進おおせつけられたとある。そのほか十余藩主に行幸に随行せよとの命が伝えられた。ここまでは長州藩の我が世の春である。この行幸に大きな夢を抱く彼らは、足下に穿たれた陥穽にまだ気づいていない。

孝明天皇は烈しい攘夷論者であったが、倒幕の意思などまったくお持ちではなかった。あくまで幕府を中心に公武合体して攘夷をはかろうとなさる。尊攘派が尊王攘夷をスローガンに掲げつつ、その底に倒幕の針を含むことが、次第に、天皇の保守的体質にアレルギ一を起こさせていく。天皇は、過激な尊攘派の行動を毛嫌いされていたのであり、それを考慮しなかったと

ころに尊攘派の運動挫折の要因があった。

《久途宮親話聞書》の伝える所によれば、攘夷親征決定後、孝明天皇は中川宮にひそかに内勅を下された。

「去月来、公卿諸侯より、幕府勅使を奉ぜず今に攘夷を實行せず、故に朕が親征を仰ぐといえども、徳川には先帝の皇女親子内親王(和宮)あり、今みずから徳川を討罰すれば親子内親王を討たざるを得ず、さすれば先帝へ対し、かつ肉親の間、大いに忍びざる所なり、さるとても皇国のためやむなきときは討罰すべけれども、深く時機をおもんばかるに慶喜(一橋)、容保(松平、会津藩主、京都守護職)、定敬(松平、桑名藩主、のち京都所司代)等が奏上の如く、いまだ武器の備わらざるに開戦するは時期早しとす、故に時日逼迫する朕が親征はしばらく延ばすべく、よって倒幕の事も止むべし、汝朕が意を体しよろしく事をはかるべしと、これによつて自後公卿諸侯よりいかほど後親征倒幕を論ずるも、朝彦命脈のある限りはその節をしりぞけ佐幕の議を唱えんことを言上す、以後しばしば御宸翰をもつてその計画を二下問あり、七(八の誤)月十六日近衛忠熙、二一条斎敬を召されて朝彦と同様の勅問あり、同人もまた詔を奉じて佐幕の議を唱う」

孝明天皇の御内心を知った中川宮は、ひそかに前関白近衛忠熙父子、右大臣二一条斎敬ら公武合体派の公卿らとともに綿密な

クーデター計画をはりめぐらしていた。事実上の武力行動担当は、会津、薩摩の両藩である。

後に長州と連合して会津を討つ薩摩が、ここでは会津と連合して長州の追い落としをはかる。不思議なような、事実である。西国の雄藩である薩長の間には、これまでたがいに対立反目しあつて深いみぞができていた。薩摩藩とすれば、尊攘派の中核となつて独走する長州藩の動きが不快でならぬ。もし長州藩の計画が成功すれば、政事の実権は長州藩や同志の公卿堂上輩に握られてしまう。むざむざと拱手傍觀こうしゅうぼうかんしてはおれぬ。藩と藩との対立関係が微妙に作用し、ついに薩摩藩は尊攘派排撃・弾圧のチャンピオンである会津藩と手を結び、会津連合を成立させる。

文久三年八月十八日午前三時頃、中川宮が近衛忠熙父子、二条斉敬、徳大寺公純らとともに参内して密旨を拝し、ただちに京都守護職松平容保所司代稲葉正邦（淀藩主・文久三年六月任）を召す。薩摩藩が前年五月二十日の朔平門外の変（尊攘派公卿姉小路公知が宮中より退出の途中、朔平門外で暗殺された事件）に關し勅勘ちよくかんを受けて宮門警備の任を解かれていたのを復し、薩摩、会津、淀三藩の武装兵に九門を警固させ「たとえ闕白たりとも召命のない者は入門を許すな」との嚴命を下す。また在京の土佐、因州、備前、阿波、米沢藩主などに「藩兵をひきい、主

従必死の覚悟を決めて即刻参内せよ」との命を伝える。やがて大砲一発、警備配置完了の合図である。こうして朝議が開かれ、中川宮が「攘夷親征の儀は全く叡慮に反するから行幸はしばらく延引遊ばされる」旨を伝宣、ただちに議奏・伝奏を免じ、国事掛はじめ参政寄人十数人に謹慎を命じてその職を廢し、中山忠能、正親町三条実愛、阿野公誠を議奏心得に任じ、また長州藩の堺町門の警衛を免じた。

尊攘派にとつて、八・一八クーデターは、どれほどの驚きであつたらう。宮廷に入ろうとする尊攘派公卿たちは門外に押し返され、薩摩藩兵と堺町門に向つてにらみあう長州藩兵に対しては「対峙たいじの場所から退去せよ」との勅命が下る。洛北の大仏妙法院に退去した彼らは、ここを本陣とし、軍議を開いた。三条実美ら急進派公卿、長州藩士、諸藩の尊攘派志士ら集まる者二千六百人。その進退の議は、結局、過激論を押しさえていったんは長州に退き再挙をはかる事に決した。

翌八月十九日朝十時頃、三条実美ら七卿は、長州藩兵らと降りしきる雨の伏見街道を南下、大阪から海路長州に向かう。七卿の一人三条西季知は五十三才の老齡であつた。こうして尊攘派勢力は京都から一掃され、舞台は公武合体派の天下となつた。この日、熾仁親王は西国鎮撫使を罷免ひめんされている。

この政変に熾仁親王の果たした役割は明らかでない。しかし

その後も親王が失意の長州藩を慰め力づけ、朝廷間のとりなしに努力されていたことは、有栖川宮家の諸大夫らと長州藩藩老との往復書簡などでもうかがい知れる。

過激な尊攘派を追い落とされた孝明天皇であるが、攘夷の叡慮は少しもかわらぬ旨、新たに勅命を出された。八月二十七日、在京の池田慶徳、蜂須賀茂韶、上杉斉憲、池田茂政らが連署し「監察吏を関東に派遣し、鎖港を幕府に厳達する」ことを建白した。これと前後して、一橋慶喜からも攘夷監察吏下向の内願があったため朝議は決し、九月一日、熾仁親王に対し「攘夷別勅使として東下し、とくと実況を監察せよ」とのご沙汰が下る。

別勅使拜命の翌九月二日、熾仁親王は朝廷において中川宮と激論に及ばれた。その内容は判明せぬが、日下部武雄（長州藩士北垣晋太郎改名）から品川弥二郎（長州藩士）にあてた書簡の一節に「当日二日、有栖川宮、中川宮と舌戦これある由にござ候、有栖川宮さまは近近関東御下向の趣に聞こえ候、敵地へ御入の事故、御心配と承り申し候」とあるところから、ほぼ推察できる。後のことであるが、明治十年一月、熾仁親王が車駕に供奉して京都に御滞在中、ある夜、家扶島津定に対して次のように語られたと伝えられる。

「今日は久迩宮（旧中川宮）とゆるゆる面会、兩人打ち連れ立ちて既往の事どもを話しながら、御所内を徘徊せり。その

節、久迩宮より『ここは前年貴王と議論せし処なり』と言はれき。予答へて『いかにも然り、追懐一番、種種様様のことこそ、皆今日の盛を来たせし原因なれ。されば前年、貴王と争論せしことも、また維新の大業を翼賛する所以の一部なり』と答へしに、久迩宮は『今貴王の一言を承りて大いに安心せり。願はくば御滞在中、弊邸に來臨を賜はり、昔語りをいたして一夕の歡を尽くさむ』と申され、真実に喜ばしき体に見受けられたり。久迩宮は、年来、自分に対して、よほど心配しておられしものと見ゆ」

朝議はさらに攘夷別勅使の副使を大原重徳に、随行を因州・津山両藩主に命じたが、いずれも固辞して受けなかった。一人熾仁親王は九月三日参内しておうけし、随従の人員を選ぶ。また水戸、因州、津山等の親縁の諸藩に各藩士十数名を警衛のため派遣することを依頼される。

京都の政変を知った幕府では、老中酒井忠績を上洛させる。九月十四日、酒井は参内して將軍家茂の親書を奉り、攘夷の遅延を陳謝する。また江戸では横浜鎖港の談判を開始したので、徳川慶勝（尾張藩主）、徳川茂承（紀州藩主）、松平容保（会津藩主）らが上書して「しばらく熾仁親王の東下を見あわせ、関東の処置に一任されたい」と奏請した。朝議はついにこれを認め、十月七日、熾仁親王に東下猶予の沙汰が下る。（敬称略）